

## ビラニスムの成立と変容をめぐって

——メーヌ・ド・ビラン研究 (I)——

藤 江 泰 男

Établissement et modifications du biranisme

Yasuo FUJIE

アズヴィ版・メーヌ・ド・ビラン著作集 (1984-) の新たな刊行もあって、80年代以降、ビラン哲学の全体像の解明には、以前よりも多様な素材が提供されるようになってきた。『人間学新論』のテキストに代表されるように、これまで研究の前提となっていたティスラン版の著作集 (1920-1949年)<sup>1)</sup>との相違が顕著であり、従来のイメージは根本的修正を迫られている<sup>2)</sup>、と言っても過言ではないであろう。

こうしたフランス本国での動向を受けてか、日本においても近年、本格的な研究<sup>3)</sup>や著作・評伝の翻訳<sup>4)</sup>の刊行が相次ぎ、メーヌ・ド・ビランの研究環境は遅まきながら漸く整ってきた、と言えようか。

さて、ここに本稿を著す趣旨は、そうした思想潮流をささやかながらでもサポートすることを願って、ということはもちろんであるが、さらに、筆者にとって最大の関心事である「コギトの系譜学」を、ビランにおいても探究しておきたいということでもある。つまり、デカルトのコギトを意志的に語った哲学者、という表現で哲学史的に位置づけられるビラン哲学いわゆるビラニスムの実相を、何よりもビランのテキストに即しながら究明することを願って執筆したのが本稿であることを、まずはご承知いただきたい。あまりに語られることの少なかったビランの思想について新たに語り出すというよりも、あまりに概略的に語られすぎたビランのイメージないしビラニスムの全体像を、可能なかぎり実像に近づいてみたいという思いに駆られて、まずは本稿を準備した次第である。

1) Pierre TISSERAND の校訂による『メーヌ・ド・ビラン著作集』(1920-1949年) 全14巻のこと。刊行の途上で校訂者が亡くなり、最後の13-14巻は H. GOUHIER が校訂を引き継いでいる。

2) Cf. 増永洋三『メーヌ・ド・ビラン研究覚書』『メーヌ・ド・ビラン研究 I』(1994年) 所載。ティスラン版とアズヴィ版との『人間学新論』の扱いの違い、特に、アズヴィ版での「精神の生」に関わるテキストの大幅な削除の問題が、ティスラン版の意義も含めて精細に分析されている。

3) 北明子『メーヌ・ド・ビランの世界』(勁草書房、1997年)

4) メーヌ・ド・ビラン『人間の身体と精神の関係』(早稲田大学出版部、1997年)  
アンリ・グイエ『メーヌ・ド・ビラン、生涯と思想』(サイエンティスト社、1999年)  
/ (Henri GOUHIER, *MAINE DE BIRAN par lui-même*, AUX ÉDITIONS DU SEUIL, 1970)

## I. メーヌ・ド・ビランの思想的発展の概観、あるいは予備的考察

さて、メーヌ・ド・ビランの思想は、イデオロジストたちとの共闘ないし格闘の時期からはじめて、それを漸く脱し自己の思想の独自性（つまりは、ビラニズム）を確立した時期、さらには、その思想の修正ないし調整の時期、最後は、その思想の限界を痛ましくも自覚する時期、といった概括でおおむね表現できるような変化・発展を遂げていったように思われる。

この種の問題に関する論文なり著作はすでにいくつか見られるところであり、日本でも増永氏の著作<sup>5)</sup>をはじめ、的確な解説や精細な分析に事欠かない状況であることを、まず述べておこう。われわれがここに提出する論考も、そうした先人たちの業績に支えられたものであることは言うまでもない。

さて、テキストの分析に入る前に、われわれも、ビラニズムの変遷の全体について確認しておこう。この方面での最も詳細で説得力のある研究として、すでにグイエの業績がある<sup>6)</sup>。その著作を導きの糸に、ビランの思想的変遷のあとを見ておこう。

### 1) 「ビラニズム成立以前の段階（あるいは前ビラニズム的段階）」

彼の著作で言えば、『思惟する能力に対する習慣の影響<sup>7)</sup>』（以後、『習慣論』と略記する）によってメーヌ・ド・ビランが哲学者としてはじめて世に認められた時期を指摘しておかねばならない。つまり、フランス・アカデミーの公募論文に応募し受賞する（1801年の論文は佳作。受賞は1802年）ことによって、それ相当の世間的評価を得た頃ではあるが、のちのビランの思想的発展から見て、まだその独自性を確立していたとは言い難い時期に当たるとされる。この時期をグイエは、「前ビラニズム的 (prébiranienne)<sup>8)</sup>」段階と呼んでいる。それは、当時の支配的哲学であったイデオロジーの立場、端的に言えば、コンディヤックの感覚論に則して自己の思想を構築しようとしていた時期であるからである。さらに広い射程において眺めるならば、それは、「ペーコン、ロック、コンディヤック」とともに、当時の支配的思潮の中で自身の哲学的立場の確立を目指し悪戦苦闘していた時期である。当時のアカデミーを牛耳っていた「近代主義」的思潮のことを、グイエは「実験的感覚論 (sensualisme expérimental)<sup>9)</sup>」というタームで総括している。

こうした近代主義的思潮が対抗していた思想とは、デカルト哲学を頂点とする「生得説」

5) 増永洋三『フランス・スピリチュアリズムの哲学』（創文社、1884年）

6) アンリ・グイエ『メーヌ・ド・ビランの回心 (Les conversions de Maine de Biran)』（J. Vrin, 1947年）。新たな『メーヌ・ド・ビラン著作集』の責任者たるアズヴィも、彼の著書の中で、グイエがこの著作で提起した諸回心の考え方、つまり思想的变化の段階については同意している。「それ〔諸回心に関するテーゼ〕は、この時期以降に現われたビランに関する著作によって疑問を呈せられてはいない」（F. AZOUVI, *Maine de Biran*, J. Vrin, 1995, p. 10）と語り、併せて、グイエによる「連続創造」としてのビラン哲学の性格づけを紹介している。

ビランに関するグイエのもう一つの著作、『メーヌ・ド・ビラン、生涯と思想』の方は、そのシリーズの伝統を踏まえて、なるほど評価的内容を中心としてはいるものの、前者の簡略版ないし通俗版というわけではない。思想的発展についても過不足なく記述されており、独自の展開と奥行きを秘めた魅力ある著作となっている。

7) *Influence de l'habitude sur la faculté de penser* (1802), *Œuvres*, t. II, éd., F. AZOUVI, 1987.

8) GOUHIER, *Conversions*, p. 308.

9) *Ibid.*

を主張する考え方である。この対立は、何よりも「実体」や「魂」の概念、つまり「コギト」の考え方や表現と直接関係しており、当然のことながら、近代主義的路線にとってデカルト哲学は、「時代遅れの形而上学」として打倒されるべき対象となっていた。従って「コギト」も、デカルトの主張のままに受け入れることはできない。生得観念の立場をとらずに、いかに認識の発生と客観性を論証できるかということが、当時のビランの最大の関心事であった、と言ってもよいであろう。グラトゥルールの哲学者は、まだまったくの「イデオログ」だったのである。

この時期を脱することで、ビランはビラニズム (biranisme : ビラン哲学) を確立することになる。

## 2) 「ビラニズムの第一段階 (1804–1812年頃)」

コンディヤックの思想的影響をようやく脱して、自己の立場を、形而上学よりはむしろ心理学的発想に集中する形で確立する時期が、このビラニズムの第一段階にあたる。ビラニズム確立の時期ではあるが、そのビラニズム自体が変化・発展を遂げるので、その「第一段階」という表現を用いてもよいであろう。

さて、この段階は、ビランの著作で言えば『思惟能力をいかに分解すべきか<sup>10)</sup>』(以後、『思惟の分解』と略記する) から『心理学の基礎についての試論<sup>11)</sup>』(以後、『心理学の基礎』と略記する) の執筆時期に当たる。グイエによれば、合理主義的伝統と経験論的伝統とをともに受け継ぐ形で、「人間精神の科学」を確立しようと目指していた頃とも表現されている。さらに彼は、次第に合理主義的伝統がその「比重を増してゆく」段階、とも評している<sup>12)</sup>。

ここに確立されたビラン哲学、つまり「努力の心理学」として特徴づけられるビラニズムの第一段階については、第二章でもう少し詳しく分析したいと思う。本章では従って、その枠組みの確認のみにとどめることをご了解願いたい。続いて、ここに確立されたビラニズム、いわば心理主義的ビラニズムが根底から揺さぶられる段階が、ビラニズムの第二段階が来る。

## 3) 「ビラニズムの第二段階」

ビラニズムの集大成となるはずであった『心理学の基礎』が1813年に中断する。それが、ビラニズムの第二段階のはじまりである。関心の軸が、人間精神の科学から「諸原理の科学」へと変化し、実体概念の考え方の変化と相まってライプニッツとデカルトの哲学がビランの中でさらに比重を増すことになる。つまり、実体とは単に受動的であるにとどまらず、能動の実体というものも可能であること、それがライプニッツ的力の概念の重要性の自覚を介して理解されるようになる段階であり、「ビラニズムの第二段階<sup>13)</sup>」と言える。同じように実体である魂と物体との差異が、能動性や力の有無によって理解されることにな

10) *Mémoire sur la décomposition de la pensée* (1805), *Œuvres*, t. III, éd., F. AZOUVI, 1988.

11) *Essai sur les fondements de la psychologie et sur ses rapports avec l'étude de la nature*, *Œuvres*, t. VIII–IX, éd., P. TISSERAND, 1932.

12) GOUHIER, *op. cit.*, p. 309. 「『思惟の分解』から『心理学の基礎』まで、前者〔デカルト、ライプニッツ、カント的伝統〕の比重が増してゆく。が、枠組みは同一にとどまる」。

13) *Ibid.*, pp. 309–310.

り、彼が以前範を仰いでいたイデオログたちとは異なり、実体ないし実体としての精神を一概に否定しなくなる段階でもある。こうした思想的深化のためには、ライブニッツの哲学、特にその力の概念が大きく寄与していることは先に述べた通りである。しかし、ライブニッツ的発想をそのまま受け取るのではなく、ライブニッツの形而上学を心理学的に再構築する試みをはじめめる時期、と言ってもよいであろう。受動的に実体を把握するコンディヤック・デカルトのラインに対し、実体を何よりも能動的に理解するライブニッツ的把握を軸に、「原初的事実の心理学に絶対的なものの心理学を追加するのが、ピラニスムの第二段階<sup>14)</sup>」である、とグイエは評している。

この時期は、ピランの著作で言えば、『自然科学と心理学との関係』(未完に終わった著作)が執筆されていた時期に当たる。ピラニスムの第一段階が「努力の心理学」として特徴づけられるとすれば、この第二段階は、「信念 (croyance) の理論」が展開された時期としても位置づけられることになる。

こうした絶対的なものへの目覚め、われわれの思考にとって「原理」として前提にされているもの、ないしは、われわれの思考を逆に支えている「概念」の重要性に気づく時期に続いて、さらにピラニスムの第三段階あるいは最終段階が来る。

#### 4) 「ピラニスムの第三段階」

この段階は、グイエの別の著作の表現を借りれば、「精神的生<sup>15)</sup>」の時期、あるいは、心身の分離がその哲学の正面に浮き出る時期とでも言いうる段階のことである。もちろん、これを最終段階と言うのは便宜的な呼称にすぎない。というのも、単に、この時点でメーヌ・ド・ピランが亡くなったというだけの話で、この立場がピラニスムの終着点ないし到達点であるとは必ずしも言えないからである。彼のうちで、宗教的関心の高まり、パスカル、特にフェヌロンへの関心の高まりが認められるのがこの段階の特色ではあるが、その超自然的影響への関心も、単に宗教的なないし形而上学的側面から考察されているだけではなく、彼の心理学的関心に根ざすものであったことを忘れてはならない。心理学的ないし経験的に検証できるかぎりでの恩寵の作用、超自然的作用が問題にされるのであって、単に形而上学的に論じられたわけではないのである。

この時期の代表作となるはずだった『人間学新論』もまた、未完にして未刊に終わっている。このように、「完成に至らない」ということが、メーヌ・ド・ピラン哲学の根本的特質の一つとなっていることを、ここであらかじめ指摘しておきたい。自己の思想の体系的完成を目ざしながらも、そこに至りえない哲学、自己の体系の弱点や破綻を冷徹に自覚しつつ、その克服をたゆまず求め続け、遂にその探究の途上で倒れた哲学、こうしたことがピラニスムの特質そのものである、ということは何よりもまず確認しておこう。このよう

14) *Ibid.*, p. 310. 別の箇所では、グイエは次のようにも語っていた。「〈人間精神の科学〉が〈諸原理の科学〉のうちに溶け込むに依りて、哲学を、それが原理という言葉で何を意味したか、に即して分類するほうが明らかに好ましくなる。生得性はもはや決定的な基準ではない。真の分割線は、実体の観念の支配する教説と、力の観念の支配する教説との間にある。そのとき、近代という時代において、列の先頭にデカルトとライブニッツがいる」(*Ibid.*, p. 309)。この時期のピランの関心が、何よりも「原理」に向かっていること、さらに、そこでのライブニッツの力の概念の重要性が読み取れるであろう。

15) Cf. グイエの前掲書(『メーヌ・ド・ピラン、生涯と思想』)の第六章と第七章が、この時期のピランをこまやかに描いている。

なビランの性向を踏まえるとき、『人間学新論』の未完成も、それ自体驚くべきことではなくなるだろう。むしろ、開かれた発展のシステムとしてビラニズムを捉えるための何らかの「支え」を、そうした了解は提供してくれるのではなかろうか。ビランの愛好した表現を借りるならば、ビラニズム理解の「支点 (point d'appui)<sup>16)</sup>」を、それはもたらしてくれるかもしれない。

以上、前ビラニズム的段階からビラニズムの中の三つの段階まで、ビランの思想的発展を四段階に区切って辿ってみた。彼の思想的変遷の概観については、これで終わりにしたい。というのも、本稿の趣旨は、単にメーヌ・ド・ビランの思想を全体的に眺望することにつぎるのではないからである。個々の思想的変化や発展をテキストに即して辿りながら、ビラニズムの中核部分を浮き彫りにすること、さらには、デカルトのコギトの哲学史的展開の中でビランの果たした役割ないし意義を探究すること、これらもまた、本稿の目的としてわれわれが念頭に置いているところである。

## II. ビラニズムの第一段階 (努力の心理学)

この時期の幕開けを飾る著作は『思惟の分解』であり、それを受けて『直接的覚知について<sup>17)</sup>』(以後、『直接的覚知』と略記する)が執筆される。いずれもアカデミーの提出した課題に応ずる形で構想されたものであるが、前者が本国フランスの、後者がベルリンのアカデミーの課題にそれぞれ答えたものであり、いずれも受賞論文(1805年および1807年)となった<sup>18)</sup>。この両著作に続いて、もう一つの受賞論文(コペンハーゲン・アカデミー)『人間の身体と精神の関係』(1811年受賞)が書かれたのち、この思想段階の最後を画する著作となる『心理学の基礎』が準備される。この著作の未完成が、ビラニズムの新展開を告げることになる。

こうした著作の執筆年代を見れば明らかなように、ビラニズムが確立される1804-1805年という時期の重要性がわかるであろう。本稿では、ビラニズムの誕生を『思惟の分解』を中心に考察するつもりであるが、その準備段階や、その挫折に通じることになる『心理学の基礎』をも射程にいれながら展開したいと思う。デカルトのコギトとの関係についても、当然言及することになる。

### 1) ビラニズムの成立前夜

ビラニズムの基本的特徴として一般に指摘され承認されているのは、何よりも「原初的事実 (fait primitif)<sup>19)</sup>」の発見であり、デカルト哲学になぞらえれば、それはコギトの発見にも匹敵するビラン独自の哲学的見解の発見であり、またその展開である。

16) Cf., 同書(邦訳) pp. 94-95に支点の由来とその射程についての言及がある。原典では pp. 84-85。それは、ビランが「人間の科学」に何を期待していたか、さらには「宗教」に何を期待していたかを理解するためのキーワードでもある、とグイエは見なしている。

17) *De l'aperception immédiate* (1807), *Œuvres*, t. IV, éd., F. AZOUVI (1995).

18) もっとも、『直接的覚知』の方は第二位のメダルを授与されたのではあるが。

19) この概念が主題的に展開されるのは、もちろんベルリン・アカデミーへの応募論文(1807年)以降であるが、その主旨については、すでに『習慣論』の段階から認められるところである。

ビラン独自の哲学が『思惟の分解』執筆の過程で形成されたことを否定することは、もちろんできないが、その哲学的立場がこの時点で突如出現したわけではないことも、あわせて留意しておかねばなるまい。というのも、この段階以降ビランが新たに提起することになる「原初的事実」の考え方は、その素材にしる、表現形式つまりその文体や展開の仕方にしる、彼のデビュー作『習慣論』の中で、すでにかかなりの程度まで練り上げられていたと思われるからである。その豊かな体系的帰結までは必ずしも自覚化されずに、そうした考え方が記述されていたという問題はあれ、ある意味では、イデオロジストたちの見解を十分に批判し乗り越える立場がそこで提示されていたことも、紛れもない事実である。

ここでは、本論の主旨に連なるかぎり、こうした次第をビランのテキストに即して確認しておきたい。ピラニスム成立前夜のビランの「原初的事実」を、確立期のそれに直接連なるかぎりで粗描したのち、『思惟の分解』のテキストの分析に移りたいと思う。

ところで、デカルトのコギトの革新性をなす特徴（それは同時に、その限界でもあるが）は、内在性への徹底したこだわりであり、いわばその絶対的内在性の視点から、考えること・思惟（あるいは意識）の存在の確実性と対象の存在性の不確実性とが対比的にえぐり出されるのである<sup>20)</sup>。

この内在性ないし主体の一元的存在性の確立からはじめるデカルトのコギトは、従って、周知のように、客体ないし対象の存在や認識の客観性がそのままではもたらされ得ず、「第三省察」以降の長く困難な道程を要請することになる。身体なり対象の存在は主体の存在のあとに証明される、というこの論理的順序こそが、デカルト哲学の特質そのものをなし、その革新性と限界のいずれをも貫通するのである。

精神（意識）の物体に対する、こうした論理的ないし権利的先行性は、その解釈にニュアンスを容れうるものではあれ、基本線としては否定し難いものである。メーヌ・ド・ビランの哲学、後に「努力の心理学」という表現で総括されることになる哲学が何よりも問題にし糾弾したのは、この先行性であり、「原初的事実」に即してこのゆがみを矯正することであった、と言ってもあながち間違いではなからう。つまり、コギトは、デカルトが主張したような主体への内在のみにおいて確立される事実ではない、とビランは異議を唱えるわけである（事実、この種の批判を、いくつかの著作のなかで繰り返し彼は説いている）。これこそ、ピラニスムの基本的発想であり、『思惟の分解』に先行する1802年の『習慣論』においてすでに、この側面からの問題提起は十分になされていたと言える。

まずはテキストに即して、ビランにとっての「自我の確立」ないしは「コギトの発見」が、つまり、ビラン独自の「努力感の発見」が語られる件を見ておこう。最初の受賞論文の長い導入部に、それはまず見いだされる。

**その物体は依然私の手のうちにあるとする。指を内側に折り曲げながら、その手を閉じようとする、それらの指の運動は突如、それらが押しそれらを相互に遠ざけるある**

20) たとえば、ミッシェル・アンリのデカルト「第二省察」の解釈を参照のこと（『精神分析の系譜』、法政大学出版、1993年、第一章）。独自の現象学的発想からデカルトのコギトを読み解こうとする彼は、コギトの核心を「見デイルト私ニ思ワレル」という表現のうちに見だし、さらに、その確実性の根拠を、思惟の自己自身に対する絶対的内在、「根元的でほとんど考えられない内面性」（*Ibid.*, p. 34）として決りだす。

障害物に止められる。新たな必然的判断が生じる。それは私ではない。固体、抵抗の判明な印象、それは、私のなす強制された運動、私のなす努力によって構成されている。その努力のうち私は能動的であり、さらには私は、私が何の影響も与え得ない触覚的性質（つるつるした、ざらざらした、冷たい、熱い）と称されるものに対応する、多少なりとも感受的な変様でもある。

強制されたどんな運動からも生じるこの努力の印象にしばし注目しよう。それをよく認識することがわれわれには必要だからである<sup>21)</sup>。

ここで言及されている「努力の印象 (impression d'effort)」というタームは、ピラニスムが誕生する『思惟の分解』以降の展開で見られる「努力感 (sens de l'effort)<sup>22)</sup>」と微妙に異なっているが、言わんとするところは変わらない。努力感と訳してもさしつかえないであろう。上に引用したテキストが、われわれの日常経験する感覚的印象に注目しながら心理的事実の原初的構造に迫ろうとする件であるので、その感覚的印象の中に出現する能動的な印象にからんで努力感が確定されることになる。実はこの箇所在先立って、次のような一節が認められる。デカルト的コギトとの対比がより印象的に記されている文章でもある。つまり、

私が運動するとき、私の存在は外に広がるが、常に私自身に現前していて、継起的にあるいは一度に、さまざまな箇所で、私の存在は見いだされ捉えられる。なされたどの運動もどの一歩も、それぞれ非常に判明な変様である。そしてそれらの変様は、私を二重に触発する。すなわち、変様それ自身によってと、その変様を決定する行為によってである。運動するもの、もしくは運動しようと思志するものは、私である。そしてさらに、動かされるものも、私である。まさしくここに、私は存在する (*je suis*) という人格の第一の単純な判断を基礎づけるために必要な関係の二項 (*deux termes du rapport*) があるのである。全面的に受動的な印象において同様な基礎が見いだされうるとは、私は思わない。……<sup>23)</sup>

私を本質的に構成する二つの要素、受動的印象と能動的印象とがともに成立しているかぎり、いわゆる私の存在が論証可能になると言えいいのだろうか。コギトにあっても、そうした人間の異なる二種類のあり方に注目すべきである、と言うわけである。私の能動性は、受動的印象との関係でこそ現れる、と言えさらに正確かもしれない。

つまり、われわれが自己を意識できるのは、能動的に何らかの運動を行う、ないし行おうとする際であるということ、まったくの受動的なあり方、たとえば感受的状态にまったく埋没しているかぎり（それが可能であれば、だが）、われわれは自らを他と区別する契機をもたない。つまり、単に感覚なり感情の奔流に流されるがままに生きているのであり、

21) ピラン『習慣論』p. 137.

22) 内感 (sens intime) としての努力感 (sens de l'effort) は、ピラニスムの基底的概念となるものであるが、『習慣論』では、それが多様な impressions の中で見いだされてくるので、impression d'effort と表現されている。

23) ピラン『習慣論』p. 135.

コギトの確立などあり得ない、と見なすわけである。

かくして、ビランにとっての原初的確実性は、「純粹に感受的な作用 (sensations purement affectives)」をも含めた感覚作用一般において主張されるのではなく、ある種の能動性、つまり運動する私に関係づけられて提起されることになる。しかも、この能動的な私は、いわば私一人では成立していない、というメリットをもつ。つまり、私が私として成立するのは、私によって意欲された運動が、それに抵抗するものとの関係で、つまり、運動－抵抗という二項的關係として出現するときである。このような事実はもちろん、後に「原初的事実」のタームで詳細に展開されることになるのだが、同種の見解は、「努力の印象」ないし「努力感」の分析を通して、『習慣論』の中にも十分に盛り込まれていたと言える。

原理的確実性が出現する場、デカルトにあってコギトが発見され哲学の第一原理として確立される場が、メヌ・ド・ビランにあっては、努力感の徹底した分析を介していわば再発見され、定着される。たとえば、最初の引用箇所が続けて、ビランはこう語っている。

努力とは、運動する存在ないし運動しようとする存在と、その運動に対立するなんらかの障害とのある関係の知覚を、自らとともに必然的にもたらすものであり、運動を決定する主体ないし意志がなく、抵抗する項も存在しないとすれば、努力など存在しないし、努力がなければいかなる認識も、いかなる種類の知覚もない。

もし個体が動き始めようと思わ (voulait) なければ、ないしはそう決心しなければ、それは何事も認識することはないだろう。もし何ものも彼に抵抗しなければ、ここでも彼は何ものも認識しないだろう。いかなる現存についても懸念することはないだろうし、彼自身の現存の観念さえももたないであろう<sup>24)</sup>。

努力という感覚が、二つの要素ないし二つの存在の關係として分析されているのがわかるかと思う。運動しようとする存在、いわゆる主体としての私と、その運動に多少とも抵抗するもの・障害となるものが、ともに一つの關係を構成する二つの要素・二つの項として指摘されているわけである。

ここで注意して確認すべきは、努力という、いわば主体の感覚に属すると思われる領域において、それを条件づける客体的・客觀的要素、つまり物理的抵抗（もちろん、物体の抵抗にかぎらず、身体ないし筋肉の抵抗も併せて考えるべきである）が、主体と共有する「一つの關係」の不可欠の一項として、組み込まれて提示されている点である。換言するならば、「努力の印象」を通して分析され発見されたのは、主体の存在と客体的抵抗とが併せて一つの關係を構成しているということ、いずれの構成要素が先立つかが問題なのではなく、原初的事実としてこの關係がまず見いだされるということ、さらには、抵抗なくして主体の存在の自覚はなく、運動の意欲の自覚もないということである。

こうした原初的二項關係こそ、努力の印象を分析する中で明らかになった「事実」である。この原初的事実たる努力感は、あくまで事実として検証された二項關係であって論理的要請や權利的構成物なのではないということを、デカルト的コギトとの關係で最後に指摘しておこう。

24) *Ibid.*, pp. 137–138.



こうした「事実」へのこだわり、ピランの哲学に特徴的な「事実」へのこだわりは、もちろん当時の主流の思潮であったイデオロジストたちの思考スタイルと共通する傾向でもあろうが、コギトの解釈にあつては特に注意を要する点であるように思われる。「私は考える」と「私は存在する」との距離、あるいは「思惟する私」と「思惟するもの」ないし「思惟する実体」との微妙だが根源的な差異を、ピランはここにおいて、つまり原初的事実そのものにおいて、あらかじめ排除しておこうとするのである。

実体という「概念」自体が、この時期のピランには受け入れ難いものであったのだが、さらに、努力感ないし意識の「事実」としての分析がそれを不要にしたのである、と付言しておこう。

さて最後に、努力と抵抗との相関関係について言及している件を見ておこう。自己の存在の自覚は、運動を開始すること、開始しようとするをまっけてはじめて成立するものであり、したがって、ある種の抵抗との関係の中でこそ成立することを語った後、以下のようなまとめの一節が続いている。つまり、

従って、努力の印象は、多くの差異、つまり、打ち勝ちえない・透過できない障害に対応するその最大限から筋肉抵抗の最終段階に至るまで、多くの差異を容れうるものである、ということがわかる。第二に、この印象が存続するかぎり、絶えず意志する自我(moi)と抵抗する障害との知覚される関係が存在する、ということがわかる。それ(努力の印象)はあらゆる関係の源泉であり、第一の根拠である。

抵抗が安定していれば、努力は意志に依存するのであるが、抵抗が次第に弱まり消失するに至れば、努力と意志とはそれとともに消失する<sup>25)</sup>。

抵抗と運動とはいわば相関関係であり、その相関関係の中で、自我は、意欲する主体として意識の中に浮かび上がることになる。能動性としての私の自覚は、その意欲する運動に対する抵抗を感じることが無ければ成立し得ないということであり、それはまた、全くの受動性・全くの感受的状態の中では自我の成立自体あり得ないということでもある。いわゆる「コギトの能動化」として哲学的に位置づけられるピラン的コギトも、こうした原初的関係を踏まえることなしには、正しく理解されることは期待できないであろう。

以上見てきたように、「原初的事実」というターム、文字通りの「努力感(sens de l'effort)」というタームは使用されていなかったにしろ、その主張を提起しうる諸要素はすでに十分に準備され省察されていた、と評してよいであろう。努力としての自我、能動性により浮かび上がる自我、その自我の構成を可能にする関係の一方の項たる身体的・物的抵抗の措定、自我における分裂というよりも自我の自覚における二項関係の成立、こうした概念装置とスタイルとは、『習慣論』にあつても十分に熟成して提起されているのである。この点を確認して、最後に、『習慣論』段階での認識能力に関わるピランの着想について一言しておこう。というのも、能動と受動との区別の中から自我が関係として現われる、という

25) Ibid., p. 138.

発想は、同時に、感覚作用 (sensation) と知覚 (perception) との違いに対応しているからである。つまり、われわれの認識は、なんらかの能動性に裏打ちされなければ成立しない、とピランは見なしている。知覚が成立するのは、ある種の運動的意欲・運動的感觉とその抵抗との関係の中で、その具体的関係においてでしかありえず、全くの受動的感觉作用つまり感受的要素のみ、受動的要素のみの感覚段階では、こうした関係の理解や自覚をもたらす契機が成立していないのである。感覚が感覚として定着される場面を想定しようとする、何らかの能動的主体と関係づけられないかぎりそれは不可能である、というわけである。これは動物と人間との違いを考えればわかり易いと思う。すなわち、全面的に感受的状态にある動物と、知覚以上の知性をもつ人間との区別の問題である。成人した人間にあっては純粋に感受的状态は想定し難いということであり、その日常生活においては、能動的ものと受動的のものが複合して与えられる、と表現すればよいであろうか。

いずれにしろ、知覚は能動的要素を含むことである種の客観性を得ているのであり、感覚作用との決定的差異はまさにその部分である。受動と能動とが、認識能力としては、感覚作用と知覚作用として現れている、と言えるであろう。ピランは次のようにまとめている。

感官についてのこれまでの分析は、私が思うに、次のことを明らかにしたように思う。つまり、われわれの多様な印象は、受動的のものと能動的のものとに、感覚的のものと知覚的のものとに区別されうるし、事実区別されねばならない。後者の印象は、運動的能力の方により依存しているし、前者(感覚的印象)は、専ら感覚する能力に関わるものである。意志が、一方の印象(知覚的印象)を規定し導くのに対し、他方(感覚的印象)では、意志は従属的でありほとんど無いに等しい<sup>26)</sup>。

感覚、知覚、記憶力、想像力といったわれわれの認識に関わる能力それぞれについて分析しながら、習慣の受動的ないし能動的影響関係について展開するのがこの著作の主旨ではあるが、それはわれわれの関心から大きくはみ出すことになるので、ここでは言及しない。

知覚のうちに認められる能動性が、その受動的項との関係において解明されている、と言えより正確な表現になるかもしれない。能動的主体の自覚は、その二面性、相関的二項関係の自覚であって、逆に言えば、どんなに受動的に見えようとも、そこに能動的項ないし能動的項の痕跡を認めることはできる、ということである。人間の認識作用のはらむ本質的な能動性の自覚は、人間の二項的關係の自覚に他ならず、身体や物体と相関的に関係するかぎりで見いだされる、というわけである。

原初的事実における、二元的にして身体的な人間のあり方が、ここ『習慣論』にあって、すでに明確に打ち出されていると言ってよい。周知のように、『思惟の分解』の執筆において、ピランは自己の立場を「主観的イデオロギー<sup>27)</sup>」として自覚することになる。それはつまり、能動的にして身体的なコギトのさらなる体系的展開に踏み入ることでもある。

26) *Ibid.*, p. 154. ピラン自身による書き込み (note) からの引用。

27) 「主観的イデオロギー、思惟する主体の意識のうちに閉じこもり、自分の知的行為の自由な行使において、自分自身と維持する内的な (intime) 関係を解明しようとする主観的イデオロギーと、可感的存在を外的事物に結び付ける関係の上に基本的には基づいている客観的イデオロギー」との違いを明確にす

そうした仔細ついて、いわゆる「努力の心理学」についての論及は、しかし、次の機会にしたいと思う。

---

ることが、『思惟の分解』の基本テーマとなっている（『思惟の分解』p. 308 / T. III, pp. 28-29）。

外的感覚から主体を構成するのではなく、主体の感覚に内在しつつ外的物体をも捉えようとする「主観的イデオロギー」の哲学を、ピランは打ち立てたいと願っているのである。